

女子大学生を対象にした期待と欲求との葛藤への対処

- 反応プロセスに着目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大橋 美保

期待は人の行動の指針の一つとして機能する。しかし、生きていく上では期待とやりたいこととの間に葛藤を抱えることや、期待とそれに応えられない自分との間に葛藤を抱えるなどがある。本研究は、女子大学生へのインタビュー調査を通して、期待に対する複雑な反応の仕方を明らかにし、期待と欲求との葛藤への対処を示すことを目的とした。

そこで、女子大学生6名に対してインタビュー調査を実施し、分析を行った。調査協力者全体についての分析と、事例ごとの分析を行った。

結果、期待への反応プロセスが明らかになった。自身の言動や周囲の者に対して相手からなんらかの反応が返ってくることによって期待が認知される。次に期待に対する感情が喚起され、期待を受け取るか否かが決定される。その後、期待に応えるか否かの決定が行われ、行動がなされることが示唆された。また、期待を向けている相手とのこれまでの関係性や期待をかけられる際の頻度、その際の相手の態度が期待に対する感情を左右していた。

母親と女子大学生の関係は親密なものであるために、期待を自身の力にしていた。一方で、母親の期待と自分の欲求との間に距離をとりにくい可能性が示唆された。また、母親との親密な関係を壊したくない気持ちを抱くことにより、自分の意思による行動が困難になる可能性が示唆された。父親との関係は親密でないために、欲求と期待との間に距離を置いていた。また、父親からの期待に応えない行動を選択したとしても今後の関係にそれほど大きな影響を与えないために、自分の欲求を優先させる行動をとっていた。しかし、その親密性の低さにより、本来父親が有している期待が父親個人からの期待として認知されず、母親の期待を相対的に大きなものとして認知する可能性が考えられた。また、集団としての友人関係を築いているため、集団から個人が個性化し、自分のやりたいことを行うことが困難であることが示唆された。

女子大学生は、基本的には期待に応える姿勢を示していた。それは、相手との葛藤の生じない対人関係を築くことで自分を守っているからである。その中で、期待と欲求との葛藤への対処として、「期待の軽視」、「欲求の開示」、「自己呈示」、「相手との接触の調整」、「譲歩」、「優先順位の決定」を行っていた。これにより、期待に応え、かつ、自分の主体的な意思を表現していた。この対処を行うために、期待と欲求との間に距離を置く必要がある。これらの対処を通じて女子大学生は主体性を獲得していくと考えられる。